

宮沢賢治は、なぜ「南昌山」で水晶を採取できたのか

鈴木健司

宮沢賢治『東京』ノート』の後半に、次のような記載がある。

盛中 二年一学キ 「藤原健次郎 南昌山 家」

「全 水晶」「全 頂上」

『東京』ノート』自体は、一九二八年六月頃の日付を持つ詩が多く書かれており、賢治在京時に初稿が書かれたと推定される詩が中心をなす「ノート」といえる。ただ、末尾のほうは、盛岡中学時代から盛岡高等農林時代を振り返ってのメモになっており、学年ごと、学期ごとに表形式で記されている。それゆえ、何かの準備のために計画的に作成したもののように推定され、賢治にとって大切な記憶がメモとして書き残されたと思われる。

『新校本宮沢賢治全集』（第十六巻下）の年譜では、加藤謙次郎の証言を紹介し、「二年一学期」ではなく「一年一学期」の可能性も否定できないとしている。本稿は採

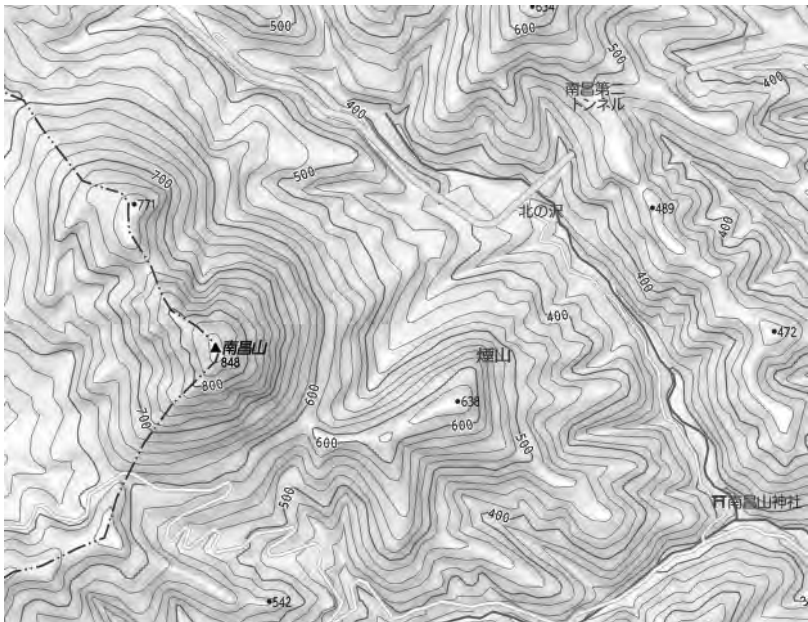
取の年月に特段のこだわりをもつものではないが、水晶の採取と同時に行われたと考えられる〈のろぎ石〉の採取を視野に入れるなら、「のろぎ山のろぎをとりにかずやとまたもその子にさそわれにけり」の短歌が、賢治が盛岡中学一年に入學した「明治四二年四月より」の項に置かれていることは、賢治の水晶の採取が「一年一学期」であった可能性も示す資料となるのではないかということとを、指摘しておきたい。

次の地図は、南昌山とその周辺を示したもののだが、宮沢賢治はどこでどのように水晶を採取したのだろうか。鉱物に興味のない人が賢治のメモを読んだとした場合、南昌山の岩体の中に水晶が埋められていると考えるかもしれない。しかし、ここで確認しておきたいことは、南昌山の場合その可能性はまったくないといつてよいことだ。というのも、南昌山の岩体は石英斑岩と呼ばれる石で、調査・観察を何回か繰り返したが、水晶が成長するための洞がなく、亀裂もない。石英脈などもまったく見当た

らない。幾つかある宮沢賢治関連の辞・事典を探しても、水晶の産地の具体的な岩質や地層については触れられていない。では、どこから水晶は採れるのか。

地元の鉱物研究者の蒲田理氏によれば、南昌山を覆っている男助層とよばれる厚い凝灰岩層が水晶の生成と深くかかわっているという。ただ、南昌山を覆っていたはずの男助層は、長い年月の風化のため消え去り、現在、五合目以上ではほとんど確認することができない。南昌山の登る場合に車を停車させる登山口あたりがすでに五合目なので、そこから登山した場合、水晶にめぐりあえることはないのである。

男助層は、海底下における火砕流堆積物である。模式地は雫石町男助付近で、第三系下部層を起源とする凝灰岩やシルト岩などの多種多様な異質礫を含むとされる。雫石盆地東南部地域に露出し、北限は雫石川、南限は豊沢川付近で、風化の状態は様々で、まったく地表で確認できない地域も多い。珪化作用を受けた部分は硬質に変化するため、削り残された形で滝や山を成すことがある。



yahoo map

地図を見ていただきたい。南昌山の北西方向に北ノ沢という流れ、南昌山神社の方に流れ下っている。現在ではそれが煙山ダムに注いで止まるのだが、煙山ダムが作られたという事実には北ノ沢の浸食力の強さが示されているといえるだろう。雨が多く降るといわゆる鉄砲水のような激しい濁流となり、その水力が長年南昌山の裾野を削り取ってきたのである。それは同時に下流域での甚大な水害の発生を意味する。一九四七年のカスリーン台風による水害などが契機となり、下流域の水害を防ぐためのダム建設が着工され、一九六七年煙山地区に「煙山ダム」が完成した。煙山は宮沢賢治の作品にも記されるゆかりの地名であるが、ダムの底となってしまった現在、当時の様子をうかがうことはできない。北ノ沢は、岩崎川となって紫波町で北上川に合流している。

宮沢賢治の友人・藤原健次郎が矢巾町白沢の出身だったため、賢治はしばしば藤原健次郎の家に遊びに行ったという。藤原健次郎の家から西の方角に南昌山が良く見え、賢治が南昌山の頂きに立ったことは「東京ノート」の記述からも確認できる。とは言え、賢治が水晶を採取した場所を正確に知ることは誰もできない。矢巾町にお住まいの松本隆氏の『童話『銀河鉄道の夜』の舞台は矢巾・南昌山』（ツワワンライフ出版、二〇一〇）では、賢

治作品「鳥をとるやなぎ」に記される「白い石原」（煙山ダム底）で水晶を採取し、それから南昌山に登ったのではないかという推定が示されている。松本氏所蔵の水晶であるが、蒲田氏が松本氏から直接伺ったこととして、その水晶は北ノ沢大滝の下で採取したもので、およそ三センチメートルくらいということであった。

宮沢賢治が、南昌山の麓から流れ出る沢やその先の河原で水晶を採取したと考えるのは、妥当なことと考える。また、小川達雄著『隣に居た天才 盛岡中学生宮沢賢治』（河出書房新社、二〇〇五）にも、宮沢賢治の水晶を採取した現場の推定が記されている。おもに、松本隆氏の案内によるものであるため、松本氏の推定と重なっているが、両著ともなぜ水晶が北の沢で採取できるのか、という地質学的な論究は行われていない。

蒲田氏によれば、「北の沢の水晶は、中新世男助層軽石凝灰岩中の裂隙を充填した熱水鉱脈中から産出するもので、水長石を伴うことから浅熱水鉱脈に属するもの」とのことである。

つまり、水晶は凝灰岩層（男助層）内に生成したものであり、谷を形成する水の方で削り取られ、転石となり、時間をかけて単独の水晶として、また男助層の凝灰岩に付随する形で河原に見いだされることになる。そのよう

な理屈で考えるなら、水晶は必ずしも南昌山とのみ重なるわけでなく、男助層の存在するところならどこでも可能性があるといえるだろう。

筆者は、文語詩「岩頸列」の研究を目的に、箱ヶ森、毒ヶ森、赤林山、南昌山、東根山などに登っているが、この山々の一帯は男助層地帯ともいえるほど、男助層が登山道に露出している。南昌山や毒ヶ森は岩体からほぼ男助層が剥がれ落ちており、登山途中で男助層を踏むことはないが、山の周辺部には当たり前のように男助層が露出している。また、箱ヶ森、赤林山や東根山では、山頂に立つまでに男助層からなる山道を、延々と歩くことになる。

下記の水晶(図1)は、箱ヶ森を下山途中に発見したものである。足裏の感触が和らい土から硬い感触に変わったのに気づき、足を止め注意深く観察したところ、珪化作用を受けた石英脈の箇所気づき、目を近づけると、大きな水晶の頭の部分が見えた。そこで掘り出してみたところ、長さが約九センチメートルあり、柱面も六面しっかりと存在している。この水晶は、柱面に微細な水晶がびっしり生成している点に特徴がある。おそらく、現在の大きさまで成長した後、一度熱水の供給が途絶え、再び熱水が供給され柱面に微細な水晶が成長したと考えら

れる。頭の部分には微細な水晶の成長はなかった。写真の通り、透明感があり、表面もとてもすっきりしている。周囲から同様の柱面のある水晶は発見できなかったが、微小な水晶を生成させたものを数多く探しだすことができた(図2)。



(図1) 高さ: 9.0cm
柱面: 3.0、1.8、2.5 2.0 2.5 1.8cm



(図2) 横幅: 約11cm 縦幅: 約9cm

既に述べたが、この男助層は、宮沢賢治が「岩頸列」(箱ヶ森・毒ヶ森・南昌山・東根山等)と呼んだ山々をすべて覆っており、宮沢賢治が南昌山で採取した水晶も、筆者が箱ヶ森で採取した水晶とは同じ生成過程を経たものと言える。男助層は地層変動の関係か、山ごとに覆い方が異なっており、毒ヶ森や南昌山、東根山の場合、男

助層の多くが風化し岩体が露出しているのに対し、箱ヶ森などは、山頂付近まで男助層が風化せず残されている。また、宮沢賢治が岩頸の一つとして意識していたかもしれない赤林山もまた、九合目近くまで男助層に覆われている。

もちろん、男助層のすべてに水晶が生成するわけではない。前提として、マグマ由来の「熱水鉱脈」がなければならぬ。温泉との関係を考えてと分かりやすいかと思う。花巻から盛岡にかけての西側、すなわち奥羽山脈側には、数々の温泉が存在している。温泉の熱源は地下のマグマの活動であるから、温泉地区の男助層は、珪化作用を強く受けていることが多い。珪化作用とは熱水に含まれる二酸化ケイ素が、男助層の凝灰岩に浸み込み、カチカチの固い石に変化することである。志度平温泉の近くにある松倉山は男助層と矢櫃層とからなるが、珪化作用を強く受けているため硬化し、風化に耐え、現在も三八四メートルの高さを保っている。

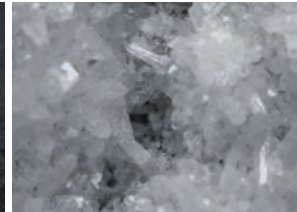
筆者が北ノ沢で採取できた水晶はごくわずかで、大きいものとしては、男助層の凝灰岩に付着していた水晶群で、柱面は比較的しっかりしており、頭部こそないが、二、五センチメートルの長さがあった(図3)。石英脈の空洞に微細な水晶を確認できる石も採取できた(図4)。



(図3)



(図4) 横幅：約5cm 縦幅：3cm



(図5)

図4の内部の拡大写真が図5である。

以前、蒲田理氏から十個ほど「北ノ沢」産の水晶の寄贈を受けたので、その一部を紹介したい(図6、図7、図8)。それぞれ小さいながらも(1~1.5cm)も、頭部がしっかりしており、水晶らしい水晶である。蒲田氏によれば、現在は大きくても2センチ程度のものしか採取で

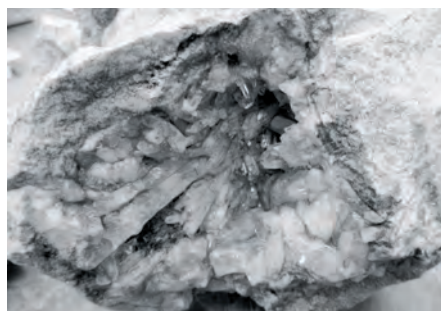
きないそうである。



(図6)

(図7)

(図8)



(図9) 横幅：約10cm 縦幅：8cm

豊沢川流域になるが、志度平温泉の駐車場側にある山は男助層（上部は矢櫃層）で、注意深く見ると、空洞に水晶を成長させた岩石を発見することができる（図9）。岩石全体が珪化しているので、水晶を取り出すことは

難しいが、幾つか取り出せたので紹介する（図10、図11、図12、図13）。



(図10) 2.3cm



(図11) 2.5cm



(図12) 3.0cm



(図13) 3.0cm

*
*
*

宮沢賢治が中学時代南昌山で採取した水晶は、南昌山の岩体自体から採取したものでなく、南昌山を覆う凝灰岩（海底に堆積した火砕流）の男助層中に形成したものである。生成の要因はマグマ由来の「熱水鉱脈」である。南昌山及びそれを覆う男助層は、地殻変動により大幅に隆起し、その後、北ノ沢が形成された結果、その浸食作用で、男助層中の水晶が地表に出ることとなった。賢治が水晶を採取したのは、北ノ沢の大滝付近かその下流域の河原と推定される。大きさは不明であるが、松本氏、蒲田氏ら地元の研究者の知見を踏まえるなら、大きくても三〜五センチメートル程度の小型の水晶を想定してよいと考える。

南昌山に限らず、同じ成因による水晶を採取することは、男助層の分布する地域（北は雫石川、南は豊沢川）ならば理論上可能である。筆者が箱ヶ森で採取した水晶もまた、賢治が採取した水晶と同じ成因と結論付けられる。

（本学教授）